

# わいふ

137号

1975 9・10

合併号



## もくじ

【特集】わいふ12年をふりかえって

『わいふ』12年の与えたもの……十日市睦子 2

ふたつの流れ ……小山やエ子 3

『ベトナム戦争』へわいふ抄……後藤美和子 5

アンケートをまとめて……高木由利子 9

【社会の窓】

私のこと ……板谷美佐子 11

買物ブギ ……日比野都 13

【文芸】

ドン・ジュアンは恋を知らない……

能勢はつみ 14

ある青春（最終回）……津堂健治 17

【お便り】

川中重雄……8

川端泰子……12

表紙絵の言葉 ……平田恵美子 10

例会のお知らせ …… 20

急告

……わいふ東京 13

# わいふ12年をふりかえって

〈わいふ〉の編集部が、この秋東京へ移ることが決った時、関西でのしめくくりの意味で「わいふ」創刊当時（S38年10月）から現在までのあなたの変化について」のアンケートと、12年を振り返って小さな文でもまとめられたらということになった。

はじめは意気込みもあり、「乞、御期待」とばかり年表などを作り、テーマ別に分けて分担仕事に入ったものの、あまりにも膨大な量に圧倒され、日がたつほどに手におえない力不足の自覚ばかりが深まっていた。もはやべ切ぎりぎり、各人がてんでばらばらの原稿で恥のかきおさめとばかり居直ったのが次の三つの文である。

## 『わいふ』12年の与えたもの

川西市 十日市 睦子

今から二年前の三月（112号）に「わいふ」を考える」という特集がある。折しも10年目を迎えようとする時だった。それは財源の問題及び内容、そして今後の方針などについてのアンケートも取られた。私もこの中に拙文を書いているのだが、「わいふ」の歴史を振りかえるというのには、私がどう関わりどのように変化したかという、私自身の生き方への問い直しであり、その中からしか「わいふ」への展望も生まれてこない。今もその時の気持と全くかわりない。だから「わいふ」の歴史を振りかえるのはそれぞれ自身に課せられた仕事であり、個々人がやってこそ意義があるのではないかと思うのだが……。とは言うものの「わいふ」というのはどんな特長のある雑誌だったのか。同じ号の中に亀山さんが「「ちゃんこ鍋」のような「がらくた箱」のような、なにが出てくるかわからないような雑然としたもの」と分析されている。確かに、三冊（「私の受けた教育」100号、「母親が外で働くことについて」118、119号）以外は、子供に腹をたてた話あり、憲法について論じたのあり、創作あり、料理ありであった。高木さんはその号で、「私たちの日常生活は多面的で、ある時は教育の問題について真剣に考え、又ある時は物価高、インフレにいかりを覚え、

女性の差別に悩み、夫婦間の出来ごとをぐちり、子供の成長に驚き喜び」というようなものであるから「それら全部を受けとめる雑誌、それも一つのあり方ではないか」との意義づけをされている。確かに人間は移り気だし、気分やだし、又移り気にならざるを得ない要素もこの世の中には満ち溢れている。「不平不満を広告のウラにでも」というあの創刊時の精神が正にこれだったのだから。書くことは喋ることよりめんどうくさい。けれども書いてしまえばスーとして、本当は書くことだけではなんら解決策になっていないのに、もうそれはおしまい、という安易さのあることも見逃せない。これは「私を含めて主婦の最大欠点は、集中力のなさ、集中の習慣のなさだと思っています。それは家事や育児が実にこまぎれで、ひとつことを長くしたり考えたりすることができないという生活の条件から知らずのうちに身についてしまう悲しき性でしょう。だからこそ「わいふ」は、一人一人にとって脱「主婦」、脱「わいふ」のきっかけ……。こまぎれの家事や育児の雑然とした時間の流れから、ふとぬけて自分にかえる時間と質を自分のためにつくくり出すきっかけにする。はつきり意識してそうとらえる。」（112号亀山その雑然とした問題の中から、自分に合ったテー

マを一つ決め、例えばPTAでも宗教でも、文学、映画でもいいからとりついてみる。意識してそういう作業をしないかぎり、脱「主婦」にはならないと鋭い指摘

手元にその号の「わいふ」がなくてうろ覚えで恐縮だが、確か41年頃、和田さんも、書きっぱなしではだめだ、論争がなければ意味がない、論争という形で参加せよというような事を書かれていたように思う。亀山さんとは言葉が違うがやはり脱「主婦」的発想をうながされていたのではなからうか。

いつかの記念集会の時、ある人が「わいふ」の目次を見ただけではいつの頃なのかというのがさっぱり分らない。我々の生活は世の中の流れと無関係ではありえないんだから、もう少しそういうものも出ないか意味がないというような事を言われた。しかし今こうして、大ざっぱに12年分を眺めてみると、全く「女の自立について」だとか「妻の座とは」ばかりを考えていたのではなかったと思う。例えば、40年アメリカが北爆を開始、ベトナム戦争がにわかにクローズアップされてきたときは、ベトナム戦争が色々な形で語られている。ベトナムと大いに関係のある沖縄での生活の報告もある。（39年→40年後藤）沖縄が復帰した47年には「復帰後の沖縄から」（47年→48年大城）、機密漏えいか言論の自由かで大問題となった「西山事件について」も（47年岡部）誰かがきちんとおさえておいてくれる。ごく最近では天皇がクローズアップされているが、上手く表現出来な

いもどかしさを、「パンツ屋所感」(50年日比野)で、ノーベル賞授賞の江崎さんにひっかけて、なんとすかっと言って下さっていることか。しかし、やはり12年を通してみた場合には、「二指摘のとおりに」と言わざるをえない。

だが次のような場合もありうるのではないだろうか。

私事で恐縮だが、ベトナム戦争について忘れられない苦い思いが一つある。

47年北爆が再開されたちようどその日、川端康成が自殺した。川端自殺の記事が夕刊一面にデカデカとのつた時、北爆再開の記事は一面ではあるが、隅っこの方に押しやられ、あまり目だたなかった。

私はもうれつに腹が立った。たった一人の人間の死と、恐らくその日何千人と殺されたであろう死と、どちらが大事なのか。たまたまその夜、東京読売に勤めている夫の友人が泊りに来た。夫はまだ帰宅していなかったで、彼を相手に私はそのいかりをぶちまけた。彼は言った。

「新聞というのは非情なんです。どちらがニュース性があるか川端と、こうなるんですよ。」と。ようしそれしや明日、朝日新聞へ抗議の手紙を書いてやると意気込みその夜はねた。明くる日は朝からばたばたしていた。そして一日が過ぎた。気になりながら二日がすぎ三日、四日とそして遂に出さなかった。「わいふ」にも書かなかった。しかしこの出来事は、私の中に一つの痛みとして残っている。そして戦争が終結された今、よりするどい痛みとなり傷となっている。

さて、「わいふ」だが、ベトナム戦争に

関して言えば、終戦だったのは記憶にも新しい今年。先にも書いたように我々が関心を持つようになったのは40年ごろからであり、44年ごろにはもう「わいふ」に出てきていない。戦争はその間ずっと続いていたというのに。

48年金大中氏誘拐、そして今年の日韓会谈でうやむやのうちに終止符。これなども誰れもがミステリーめいた関心を持って見ていたはずだし、韓国には同じアジアというだけでない思いを、一人ひとりが持っているはずだ。これなども素通りして来た問題の一つだろう。あげればきりがない。止めよう。

またこういう批評もあった。

「どろどろしたものがない、うわべだけできれいごとすぎる」と。

どろどろとは一体何なのか。夫婦間のもめごとなのか。嫁と姑のいがみ合いなのか。恋か愛か。はたまた憎しみ恨み。情念の世界を「どろどろしたもの」というのなら、やはりない。中川氏(44年ごろ)がサワヤカタツチでちらちらというところか。彼は「わいふ」にそういうものが無いのを意識してか知らずか、とにかく彼も脱会者のひとりだ。人間の情念は、古今東西の文学作品や演劇の世界のみに生きているのではない。人間の持っている側面、切りはなせない側面なのだ。

そういえば共産党の宮本発言でも問題になったボルノ。これは子供の教育や言論の自由とも関連があるはずなのだが。話題にならない一つの理由は、子供の年令が小さいこともあるだろうが、それよりなにより、より直接的なもの、保育所、

カギツ子、PTA、塾といった問題、物の値上りに食品公害といったような事の方か、さし迫った問題であり、より関心事なのではなからうか。もちろん情念の世界を捨てたのでも卓越したのでもなからうけれど。また今ひとつには、読みた

良い点であり、それがために12年間も続いた一因にもなるのだが……(136号アンケートより)

「自由さ」を求め、「気楽さ」にいたがり「物足りなさ」を口にする。それが人間ではないか、とも思う。

しかしいま「自由さ」を選ぶか「物足りなさ」を取るか、の選択が必要とされる時機にきたのだ。

そして言葉をかえるなら

「書く」ということを、「広告のウラ」的存在とみなすか、それとも「脱主婦」への足がかりとみなすか、そしてそうありたいのか。

12年という歳月が「わいふ」という小冊子を通じて与えた課題がこれであり、いまそれぞれに向って一つの結論を求めている、と私は思う。

新生「わいふ」、「自由さ」と「物足りなさ」をどのように包括しつつ進まれるのか、期待を持っています。よろしく。

## ふたつの流れ

池田市 小山 ヤエ子

ダンボールの箱につまった十二年間分の「わいふ」は、ずっしりと重い。

この歳月の厚みを読み返してみるチャンスが与えられて、一応どうにか誌面をたどり終えた時、「女性の投稿誌だった」というあたりまえすぎるものが、今更のよう

に感慨となった。

何がとびだしてくるか分らないような種々雑多な投稿文が脈絡なく渦巻いているように見えるのが「わいふ」であるが、しかし、ちよつと目を据えると、さまざまな文章の間を縫うようにしてある時は表に押しだされ、またある時期は底の方に沈みながらも、とぎれることなくこの

二年の間、追いつけてきたテーマが二つあったように思えてならない。

一つは教育の問題であり、今一つは女性の自立についてである。

そのことはこの間にだした二つの特集にも象徴されているように思う。

100号記念特集が「私のうけた教育」であり、10周年記念特集が「母親が外で働くことについて」であったのは、たまたま成り行きでそうだったとは思えない。赤ん坊、幼児を抱えた若い母親の出発点であった「わいふ」は、今まさに中年の盛りをむかえようとしている。

この年令層が中心を作っている「わいふ」のたどってきた関心事が「子ども」と「おんな」に代表されるのは必然であったように思う。

「おんな」の投稿誌であったと思う由縁である。

まず「女性の自立」についてからふれば、すでに4号で「経済的自立ということ」と題した文が出ている。

ボーヴォワールの「経済的自立こそ内的自立であり女性解放の近道である」を引用しながらも、今の社会では主婦が外で働く「時間に追いまくられて生きるだけで精神の内的自主などとはおよそ縁遠い生活だった」と経験を土台とした疑問を投げかけている。

これを受けて6号では「共がせき是非論―是の立場―」として女が働くことに収入源以上の意味を持たせた文が載っている。

このやりとりが、幼い子どもを抱え条件的に外で働くのは無理な状態に迫いや

られていても、わいふ一人一人の胸底にくすぶっていた自立への願ひに火をつける役目を果たしたのか、25号では「働く女性について」の特集がおさめられている。続いて26号では働く女性についての座談会が持たれている。

―仕事をしている時の緊張感、済んだ後の満足感は素晴らしい。家庭労働には無いものですね―

―法律ではいくら男女同権が保証されていても、経済的な裏付けが無ければ本当の平等にはなれないと思いますね―

―仕事に意義を見出していきたいといっても生き甲斐のある女性の仕事ってそうそう私達の周囲にころがっていないでしょう。これは男性の仕事にも云えるのでしょうけど―

―新しい女性として生きたいと考えてみた所で、職場にこんなに多くの圧迫があり、又その上に家事と育児との二重負担を持たされていたら、それがとてもとでも重過ぎて、つい個人主義な片隅の幸福に満足しようと思ってしまう―

この26号の座談会での様々な発言を読み返してみると、実に興味深い。

十年余りも経たはずなのにこの時の悩みはそのままだと変りない。

人間としての自立と経済的裏付けは切れない関係にあると知りながら、理想と現実のギャップにでるため息の何と切ないことか。

しかし、この共通のため息が重なった時、若いわいふ達は、現実を理想へ一歩近づけるべく保育所づくりに取りこんでいる。

母親が働くための条件づくりでかかせないワンステップ、それがぬかみそ教室「保育所づくりの記録」にまとめられている。

そして、このねばり強い運動が実って保育所が出来上った時、わいふの何人かは、子どもと離れた時間帯を得たことで自立への準備をはじめている。

ただ家中のつぶやきを広告の裏になぐり書きしようとしてはじめた「わいふ」が三年を待たずに果たした見事な拡がりと思える。

しかし、それより数年を経たの10周年特集号①②③「母親が外で働くこと」を見れば、なお大多数のわいふ達は、26号の座談会と同じテーマで悩み、ゆきつもとどろつ解決のつかぬまま、一人立ちしたい想いを執念深く持ち続けてきたことがわかる。

特徴的だと思うのは、自立への願望をそれほど強さで持ちながら、実際には「だけれども……」「だが、しかし……」と、妻母主婦の立場にしわよせのくるところを恐れて、自立をはばんでいる諸条件を克服する努力よりも、不満ながら現状のバランスを守ろうとする慎重さが上まわる姿勢が多いことである。

ここに「わいふ」のわいふたる優等生意識と「あえて無理をしない」式のものたりなさと思いがあてはまらないかと反省する。

この「あえて無理しない」を支えているものは、「一応は扶養家族でおさまっていられる」「わいふ」だからこそのものであろう。

将来「わいふ」が20周年記念特集をだすとしても、おそらく一人立ちの問題をさけて通れないのではないかと思ってしまう。

10周年記念特集をカビ臭い過去のものとして笑ってすごせる「わいふ」世代が誕生するのはいつの日であろうか。

女の生き方を追っていくと、最後には突きあたらずの老後の問題は、「恍惚の人」がベストセラーになった際の読後感や、老いた肉親の病い、死に寄せる想いにとどまり、老いは気がかりながらやはりまだ先のこととしてしか捉えられない若いわいふに切実感はない。

それとかわつて日本の女が今なおひきつづけている大きな重荷であるところの嫁姑についての意見がほとんどいいほどに見られなかったのは、たまたま「わいふ」達の家族構成が核家族に片寄りすぎたせいなのか、または教育とか自立とかの論に私生活からワンクッションおいたところで論じ合える事柄でなく自分自身をさらけださねばならぬ課題であったための抵抗だろうか。

また、その意味では女の一人立ちと何処かで衝突するはずの夫婦間のトラブルが、おのろけの域をでないのとも共通する。

一夫一婦制への疑問、浮気を含めての男と女のかかわりも素通りされている。

「わいふ」向きの文章、もしそんなものがわいふ達の頭にあったのなら、それを越えられなかったのは、「わいふ」の限界なのだろうか。良きなのだろうか。

一方、教育問題については、まず保育

所づくりと平行して幼児教育の勉強をして行こうという態度がうかがえる。

単に子どもを預けて貰える場として保育所を希むのではなく、集団教育の意味を積極的に認めていこうとする姿勢である。

それが、我が子を保育所へ通わすようになった母親達から相次いで投稿されている「保育所つ子の日記」である。

保育所つ子となった幼い息子、娘の姿を通じて、幼児教育の意義を実感として捉えなおしている文章である。

ともかく保育所がほしいと一途に願った保育所増設の要求から、更に進んで保育内容の改善、充実を希む文があちこちに見られる。

後年、これは学童保育開設の運動記録及び放課後の児童のすごし方へバトンタッチされていっている。

子どもが学齢期に達すると、PTAの学級委員や役員にかかわって行く人が多くなる。

そこでこのあれこれの体験を通じて、この時期は形骸化したPTAを告発する文が殺到することになる。

PTA会則から始まって役員の選任、学級会の運営の仕方、広報の中途、どれ一つとってみても非民主的な情けない状態に落ち入っているPTAへの疑問や腹立ちで満ちている。

しかも、ただ批判し不満を文章にぶつけているだけでなく、少しでも変革していこうとしている具体的な運動報告が「奮戦記」や「戦略・戦術」という型で発表されていて、各地域で果している「

わいふ」一人一人のたくましい実践力が誌上を通して他のわいふへの励ましや力となっている。

続いて相対評価による通知表のからくり、むずかしい教科書に端を発するスピード授業でおちこぼれのできる事、そこで起ってくる塾にたいする是非論、「くたばれテスト」と題をつけたくなる入試の矛盾、拾えば切りのないほど母親としてのわいふが吐きだした現教育に対する恨みつらみ腹立ちはページをあふれんばかりの迫力となってせまってくる。

中でもぬかみそ教室でシリーズとして載り、あと「私の受けた教育」でも抜粋されている「教科書のなかみがかわつていける」は、現教育への怒りの感情に筋道をつける作用をし、会員の反響が大きかった。

昭和35年頃を境目にして天皇や基本的人権が教科書がどう扱われはじめたかを具体的な資料をもとにして明らかにした現場教師からの告発の文である。

これがきっかけとなって、では私の受けた教育を振り返ってみようということになり100号記念特集「私の受けた教育」が生れた。

教科書と教育と人間とはいつの時代においても密接な関係にあります。それだけにとてもこわいのです。その恐ろしさをもう一度、いや何度でも心に刻みこむために私の受けた教育をふり返ってみました——特集号の編集後記にこうある。

そして、家永裁判(教科書検定訴訟)は十一年目の今日も続けてたなかわれて

いる。

こうして読んでくる内に気づいたことがある。

女性の自立についての投稿文が、こうありたい、こうあるべきでないかと、どうしても抽象的になり易いのにくらべて、教育の方は実に具体的な内容を伴って書かれている。

母親が外で働くことをはばむ諸条件の解決は、保育所づくりは別にしても、まだまだ日本では個人の才覚やころがまえでどうにかしようとする段階に置かれており、一般的には集って女の自立を運動化するにはいたっていない。

それにくらべて教育問題の方は、個人が抱いた疑問点は、PTAや地域懇談会を足がかりとして、例え尻切れとんぼになろうと、ともかくにも運動化して行こうとする方向づけがみられる。

これはまた、女性の自立したいという意識がまだまだ限られた層のものであり、働く母親が組織化されにくいのに反して、教育のひびみにむける腹立ちは、母親であるというそれだけで、共通の願いとして結び合えるからなのであろう。

その違いが「わいふ」の様々な文にも表われているように思う。

はじめにもふれたが、教育と女性の自立が、「わいふ」の大きな流れをなしていたとするならば、その理由は、この二つのテーマを切実に捉えねばならぬ年令層の「わいふ」であったことや、女だけのミニコミ誌の特徴ともいえるように、一つの世も流れのひびみは最も弱い部分である「こども」と「おんな」に集約して押し寄せるといふ証拠であるのかもしれない。

## 『ベトナム戦争』——へわいふ抄

箕面市 後藤 美和子

「独立をめざすわが民族の願望は、ただ一つしかありません。それは断固として、アメリカ帝国主義と、その従僕を叩き出し、彼らの罪惡に満ちた侵略を粉碎するのです。10年かかろうと20年かかろうと、またそれ以上の年月がかかろうとどんな困難が待ちかまえていようと、われわれは最後まで敵と戦います」

フエン・タン・ファット氏(南ベトナム解放民族戦線副議長)が、「南ヴェトナム戦争従軍記」の著者、岡村昭彦氏に

送った手紙(65・5)での言葉通り、対仏・対米の30年間の長い長い戦い、『ベトナム戦争』は、人民自らの手で全面的に勝利をつかんで終った。

かえりみると、アメリカがベトナムに視点を据えたのは、随分と古いことに驚く。49年に中国が革命を成功させ、翌年朝鮮戦争が燃え上がったとき、すぐさま時の國務長官ダレスは、対中国政策の一つとして「米軍事使節団」をベトナムに、送り込んだ。その頃、ベトナム支配を続

けていたフランスと、『反共戦線』を合言葉に手を結び、54年ジュネーブ協定が調印される迄の間、着々とその侵略の機会を窺っていたことになる。愈々、調印され南北ベトナムの分離がなされたのを待って、アメリカは南ベトナムを強化し、破壊活動によって、北ベトナムを弱体化し、ベトナム全土は勿論、インドシナ全域から、共產主義を一掃する野望に賭けた。このためには、「人と政策を変えなければならぬ」(ケネディ大統領の言葉)を、文字通り実行したのであった。

その手はじめが、ゴ・ジン・ジエム政権への介入、援助であった。しかし間もなく仏教徒を先頭に、傀儡ゴ政権への反抗、平和運動の火の手が、サイゴンを中心に拡まった。63年、ゴ政権の狂気じみた仏教徒弾圧、それに抗議しての焼身自殺、これらのニュースが矢継ぎ早に、耳許に達した時、わたし達日本のどれ程の国民が、アジアの一角に起された、ベトナム戦争の深い意味、真実の姿を知っていたことだろうか？

わたし達の小冊子『わいふ』が生れたのは、ちょうどそんな折であった。インドシナにおける新しい歴史の書き替えが、壮烈を極めて進んでいた後半の時間、正味12年間に『わいふ』も生き続けて来た。会員の目もベトナム戦争の成り行きを見つめて来た筈だ。

こんどの『わいふ』アンケートの中にも、ベトナム戦争の終焉が、幾人もの会員の心を捉えていた。これらの人達が、過ぐる日『わいふ』に書きとめてきた、

『ベトナム戦争』を読み返し乍ら、ここに、その抄録を綴ってみた。

16号(65・2)の表紙裏の言葉に、「南ヴェトナム戦争従軍記」の一節が飾られ、投稿の中にも「戦争とは？」「近頃思うこと」で「ベトナム」が登場している。「戦争とは？」の書き手は、新聞や従軍記に書かれている、痛々しい描写がテレビを見てようやく、本当なのだと、納得させられたという。又、アメリカの介入が中・ソへの刺激となって、第三次大戦に発展することさえ危惧している。

更には、自衛隊のあいまいをつき、「アメリカさまで、いつ迄も頼っている」と、今度のように、いざという時、日本は何もしてあげられない」と嘆いている。続いて、17・18・19号に読後感想の形で「南ヴェトナム戦争従軍記」のものが数篇発表されている。著者、岡村氏のバイタリテイには、一同感動し、勇気と執念に支えられた行動には、等しく傾倒させられたようだ。彼は戦争に対する「偉大な反対意見」を、報道写真の一枚一枚に托するため、南ベトナム戦争の最前線に飛び込む。又、自分自身飢え以外体験を持たない戦争について、生命を賭しても、その真実を知りたく思い、北は韓国から南はマレーシア迄赴く。果には、「純南ヴェトナム戦争従軍記」で記しているように、解放区への潜入を図り、一つの戦争をその両側から取材する事をした。

当時の『わいふ』会員の多くは、彼の筆によって、「ベトナム」との出会いを持ったのでは、なかったろうか。感想文を寄せた一人は、アメリカの援助を断って「平和」を守っているカンボジアに注目していた。日本の「平和」はアメリカ追従外交の故に、次第に脅やかされ始めているのではないかと、書き、因みに、カンボジアにおける医療費の無料化と、その当時日本では、医療費の値上げが断行された事とを比べて、今こそ「平和」の質が考えられねばならない時だと、促してあった。

又、同じ号には「ベトナム戦記」(開高健)の感想も載っている。

「負けた事がなく、戦争がある度に、豊かになったアメリカは、ベトナム農民が建国当時のアメリカ人と同根の情熱にかりたてられて、アメリカに叛逆しているのだ、というところ迄、洞察できないのだろうか」と、著者の心を慮って感想を述べた後、「アメリカの世論が、宇宙衛星よりも、ベトナムの平和問題に向って湧き起りますように」と結んであった。

18号(65・4)には、「ベトナム戦争について思うこと」の一文が載っている。先に出てきた「従軍記感想文」を含めその頃世間で頻繁になされていた、新聞や週刊誌への投書に表われた日本人のベトナム戦争への反応の示し方を、分析して書いている。反応の示し方に五つの傾向があってそこに共通しているものは、「中立的な考え」をしているというのだ。これは、国民が中立的考えにあるのではない。政府が表面だって中立的を装っていること。さらにそのことを、ジャーナリズムが単純・非政治的・感情的にのみ取り扱うことをしている。その結果、国民の間では善良・中正・非政治的 感情

的非戦論の横行が許されているのだ。と指摘している。又、たとえ命を賭しての戦場からの報道写真であっても、見るものの行動と結びつかない限り、風に吹きとばされる、はかない存在に過ぎない。ベトナム戦争の鍵を握るものは、誰か。米・ソ・中・ベトナム・日本、それぞれの国民が、まず政治的であること、これが問題解決の第一歩だと、この書き手は力強く締めくくっていた。

『わいふ』誌上では、ベトナムに関する本の取り上げは、ここで止んでいる。多くの場合、一冊の本に著わされることは、或る時期、或る断面に限られている。この後もみんなで話し合い考え合う、手だてとしての読書が、継続して企画されなかった事は、残念な事だと思ふ。24号(65・10)には、神戸の会員からベトナム戦争反対の、坐り込みに参加した経験が寄せられている。

「ベトナムをベトナム人の手に」と書いたボール紙を、首にたらし、私たちが神戸のアメリカ領事館前で坐り込みを始めから、今日で27日になります」と、リアルに始まるこの一文には、当時強烈な印象を持った会員も多かったろう。坐り込む前に、道交法を研究し、検挙されることなく抗議を続けること。文通によって、アメリカの反戦の人たちを励まし続けていること。短かい乍らも、読み手を少なからぬ、興奮に巻き込んだ筈だ。主旨の呼びかけが文末に加筆されていたが、果して会員の中の幾人が応えたのであったろうか。

45号(67・7)に来て、「雑感」の題

で、「続ヴェトナム戦争従軍記」の感想が載っているが、「自分の家庭内が、一日無事平穏に過せるということが、平和の意味ではない」という気持の高まりを述べたくだりは、そのまま會員みんなの共有していた意識だったと思いたい。

48号の出た70年・秋。佐藤首相が南ベトナム訪問を強行した。吉田首相の死とぶつつかって、サイゴンには僅かな時間の滞在に終わったのだが、こうした直接的行動は、59年の賠償協定以降、日本政府が、サイゴン政権を合法政権として認めてきたことを、一層強化し、アメリカの立場を軍事面だけでなく、道義的にも肯定したことを、はつきりと示した。

この佐藤首相の暴挙を阻止せんと、羽田空港では、学生達の闘争があった。

48号には、「私の発言」「10・8羽田に於ける一部暴力集団の破壊的行為を断固として糾弾す」この二つの投稿が男性会員からあった。

前者は「全学連が、また暴れた」と言い、後者は「彼らは、学生の中の一部のトロッキストと呼ばれる革命屋を、かき集めて、ニセ全学連をデッチあげているのです」と言い切っていた。

49号には、早速このトロッキスト云々のことへの反論があり、その中の一人の文から……(抜すい)

「48号のへわいふ」で、貴方が羽田デモの学生達を、学生運動全体から見ればたつた一握りの集まりにすぎない……と書いていました。戦争でいえば最前線に立った学生の殆どが、地方から来た一年生や、一般的な学生が多かったと聞き

ました。あの日、死んでしまった山崎君も京大の一年生でした。やむにやまれない若い情熱から、首相の南ベトナム訪問を阻止する多くの一人として、羽田に出かけたのです。労働者が、知識人が、主婦達が立ち上がらないから、学生が行ったのです。同じ世代の仲間が死んだのに、同じ大学生の貴方が暴力学生、革命屋、ニセ全学連と誹謗するのは、悲しいことだと思えます。広大にして民主的な

学生戦線を築きあげているという貴方達は確かに暴力学生ではない。けれど羽田での(貴方達がいわれる)暴力学生達が、ベトナムに、世界に、日本人の良心を見せつけてくれたのでは、ないでしょうか」続く50号にも、「暴力学生について」「羽田事件とへわいふ」48号、その他一部にこのことに触れた随筆等、やりとりが盛んにあった。

「暴力学生について」を書いた人は、テレビの画面で数人の学生が、角材で警官をめった打ちするところを見たことで学生達の暴力を批判している。ひいてはそうした息子の行動を事前に知らず、止めることもできなかった母親達にも、きびしい目を向けている。自分への戒めも含ませ乍ら。

「羽田事件とへわいふ」48号」では、「学生達を、暴徒とののしるだけでは、政府・自民党や、商業新聞と全く変わらないではありませんか」と説き、「肩をくまねばならない友人を、なぜ暴徒と呼ぶなければいけないのですか、学生の行動を僕も決して全面的に支持はしない。しかし、それならせめて、沈黙を守れない

でしようか」と訴えている。

学生運動はご承知の通り、その後、東大・安田講堂での攻防、エンタプライズ入港阻止、成田空港新設反対の三里塚闘争、さらには、「よど号」ハイジャックがあり、しかる後に、学生運動家達の終焉の場ともいふべき、あの浅間山荘事件があり、間もなく発覚したリンチ事件のいたまじさ、愚かしさに、世間は驚いた。これら学生運動について、「へわいふ」誌上で見る限り、主流(代々木派)反主流(三派)の区別さえ覚束なく見え、正直言って、彼らのことを理解するには、遠かったと感じた。

だが、後年86号の誌上に載った、「母親より、裁判官様へ」の詩文は、反戦デモに反戦デモに参加し、捕えられつながらしまった息子を持つ母親の、施政者への、精一杯の抵抗が、溢れていた。たくさん読みの手を目を、胸を深くつき刺したことがあったに、ちがいない。

51・52号(68・11・2)にわたって、「ベトナム戦争とマスコミ」が、マスコミの仕事に携る男性から出されている。

51号では、アメリカの雑誌「ランパーズ」のレポートや「朝日ジャーナル」の報道写真・岡村・開氏らの「従軍記」の紹介と共に、それらから受けた、強いショックが率直に綴られている。

「アメリカはまちがっている。結果的には、日本もアメリカの『ベトナム戦争』に協力しているのだ。にも拘らず、日本のマスコミは、その事実を、殆ど報道しない。ベトナム戦争の非人間性については、割と紙面をさく傾向にある各新聞も、

日本自身がどの程度、ベトナム戦争にのめり込み、手を汚しているかについては、殆どふれていない。いくらベトナム戦争反対を唱えたところで、日本、つまり自分自身が、この戦争によって、もつたアメリカに協力している事実を見過すのでは、本当の反対にはならない」……と、読者を多数もつ日刊紙が、「ベトナム」の報道に熱心でないことを指摘している。その他にも、

○国鉄の動力車労組が「米軍の武器や燃料を運ばされている」ことに抗って、反戦ストライキに参加したこと。

○「株」を持っている者が「一番ベトナム戦争の動きに、関心を持っているらしいこと。等、わたし達主婦の目に、日頃うつりにくかった、さまざまな映像を、誌上で見せてくれたのでした。

更に、軍需産業の話で、「朝鮮動乱の終結以来下降気味だった『特需収入』がベトナム戦争の拡大期、65年の下半期から再び上向きに転じ始めた」ことや、開氏のレポート「武器よこんにちば」の中から、名古屋の豊和工業での、工場見学が紹介されている。

○ここでは、近くアメリカ企業の依頼でAR18自動小銃を生産するらしいこと。

○これらは、通産省が契約を認めていることであり、日本の軍事協力は否定できない立場にあること。

○日本の国民が作った弾丸で、ベトナムの子供が死んだり傷ついたりしているかもしれないこと。

などなど、背筋の寒くなる指摘が次々となされ、読む者を、圧迫した。

52号では、こうした報道にマスコミが力を入れない裏にある、報道の規制の実態が、書きつがれた。

わたし達も当時、話題として知っていた「南ベトナム海兵隊戦記」が残虐すぎるとの理由で、一部放映中止。ベ平連主催のティーチ・イン「ベトナム戦争と反戦の原理―サルトルと共に」の中継録画の中止。「ハノイ―田英夫の証言」に連なる田氏への圧力。その他政局風刺の漫画のカット。政府・スポンサーの力づくでの規制、干渉のありさま等、かなり詳細に知る事ができたのでした。

一方、政府が世論対策のため「日本広報センター」を設け、「アジアに生きる―ある日本人の記録」とか「東京―ワシントン」の30分ドキュメントが、已に放映されている等も述べられて、愈々、ここに至っては、見る者一人一人が、目の確かさを持つ為に勉強しなければと、決意持たされたことでした。

そうした折、56号(68・6)に、「一九六八年、歩み出すための素材」という本が紹介されました。むのたけじ・岡村昭彦共著の岩波新書

この本では、世界中にカリスマ的魅力を振りまいて、去ったケネディ大統領が、実はアジア蔑視(自身のアイルランド出身者故の屈辱)、イデオロギー恐怖(共産主義の一枚岩の団結の脅威)を背景にインドシナを舞台に、特殊戦争を演出した仕掛人であったことが、語られていた。読んだ人も多かったと思うが、「へいわふ」には、何の反応も帰って来ていない。さて、大雑把に言って、ベトナムに関わ

ったアメリカの政権は、アイゼンハワー(53・60) ケネディ(61・11・63・11) ジョンソン(63・11・69・1) ニクソン(69・11・74・2) フォード(74・2・?) ということになる。

中でもジョンソン政権からニクソン政権の内、8年間の北爆の猛威―72・12・18・12・29迄の12日間の非情さは忘れなくてはならない―

連日連夜、悲慘を極めたニュースに、世界中の人々が震撼させられた。

わたし達「へいわふ」は、この時言葉を吐く力もなかったのだろうか。「へいわふ」はそれから後ずつと、「ベトナム」では沈黙が続いている。今となつては、不思議にさえ思われるが、仕方のないことだ。とはいえ、ベトナムの戦火が、カンボジアへと拡がった時、81号・85号にかけて試みた「憲法アンケート」では、多数の会員から「平和憲法の維持」「自衛隊の存在の不安」「天皇制のあり方への疑問」等、真剣な反応が寄せられているのは、「へいわふ」が必ずしも、「ベトナム」を無縁のものとは、していなかった証だったのだろうか。

紆余曲折を経て、73・1・27、パリ協定が成された後、依然として双方の砲火はやまず、協定違反の内情が次々と報じられて来たのは、ごく新しい記憶だ。

この短かい期間に北・南の双方で6・7万人もの死者が出た。遣り切れない悲しさを持つニュースが、その後も続いた。協定により、一見平和に見えるサイゴンの街やその周辺で、一生懸命に生き抜く子ども達の姿も又、たびたびニュース

になって流れた。

そうしたサイゴン周辺の地を訪れた日本カメラマンが、写真と作文で構成した一冊の本を出した。

「戦争おじさんへ」(ベトナムの子の作文集)というのだ。

この本を17号(73・8)に一人の会員が紹介したことで、「へいわふ」に綴られた、「ベトナム戦争」は終っている。

× × ×

一九七五年四月三十日、午前十一時三十分、サイゴンの旧大統領官邸に、革命旗が、へんぼんと翻った。

この日、「へいわふ」会員の感慨も、それぞれのがあったことだろう。

いみじくも、この歴史上、記念すべき日に生きていた者として、各自思うところを、書きとめておくことは、決して無用のこととは思えない。

ベトナム人民は勝った。アメリカ大國は敗れた。それに連なつて、日本も又、敗れた。これは、わたしの素朴な感慨だ。

学生運動に始まり、ベ平連での新しい連帯、市民運動が育ち、いまベトナムを終つて、日本の各地には、住民運動が生活の中に根つき始めている。

国民は、ベトナムからその精神を学び、それを教訓として育てることに、懸命だが、日本という国は、そうではない。利益を大幅に上げた大企業達に代表される国家だから、ちつとも敗れたとも思っていないし、学んでもいない。

ベトナムと同じ轍を、朝鮮半島の上に踏まないという、保証はどこにもない。怖ろしいことだと思ふ。

日本を念頭におくと、何からいつてよいかわからない。  
日本は目に見えない崖へ進みつつある。

日本の危機ということ、私どもは、釘づけにされている。

高群逸枝著、「東京は熱病にかかっている」の「まえがき」から。

第二次大戦を憂えてノということわり書きのついた、この詩が、わたしには、時間を超えて、そのままあてはまる気がする。

## 【お便り】

枚方市 川中 重雄

永い間のお交際でしたが、私もこの辺で、一応わいふ誌とはお別れる時期が来たのだという解釈をして引き退るつもりでいます。

法務局―建設省―市役所という風に、永い公務員生活から解放されて、今は農夫まがいの生活を楽しんでやっています。束縛されるものではなく、思う存分土との親しみを味わつての生活、どうやらこれで、人間の歩む理想的な生活経路に踏み入ったというような気持ちでいます。

「自分を守るのは自分以外にはない」というのが、従来からの私の信条でしたが、幸にしてこの根性が実を結んだようで、どうやら、悠然と余生を楽しんで生きて行けそうになった今日、まず、よかったと思つていきます。



# アンケートをまとめる

宝塚市 高木由利子



同じアンケートを読んでも、その感想は人さまざまだと思います。私のまとめも、あるいは、かなり一人よがりの読み方をしている所があるかも知れませんが、一つの参考にしていただけたらと思っています。

## ①年令

20代	5人
30代	34人
40代	20人
50代	1人
70代	1人
不明	1人

こうしてみると、圧倒的に30、40代の中年主婦が多く、わいふが、こうした年代の主婦を中心としたものである事を再確認させられました。

## ②家族構成の変化

この12年の間に、

子供が1人ふえた人	18人
" 2人 "	16人
" 3人 "	10人

合計44人。変化なしと答えた人は12人で、そのほとんどが40代の人でした。逆に5人から1人に減ったと答えたのは70代の人で、まるで人生の縮図を目のあたりに見る思いがしました。姑を引き取って同居をはじめた人も二、三あり、この数は、今後増えることも予想されます。

## ③職歴の変化

なし(ずっと無職)	21人
なし(ずっと有職)	6人
有(共働き→主婦専業)	15人
有(無職→有職)	11人

という数字が主だったものでした。中にはあれこれパートに出たりやめたり、又職種を4度も変わるなど、職を持つ主婦の悩みを強く感じさせられました。尚、ずっと有職で変化のなかった6人は公務員がほとんどで、その人たちの大変な努力の結果ではあるでしょうが、それでも比較的公務員は共働きを続けやすいと言えそうです。

現在の無職者 40人

有職者 20人

## ④住所変化の有無と理由

2対1という数字が出ています。	
変化あり1回	27人
2回	8人
3回	8人
4、8回	8人
変化なし	10人

最高で8回も転宅した人がありました。理由のトップは夫の転勤で、次に持家新築・マンション購入などによるもの、そして結婚の順になっています。

## ⑤身体的変化

俗に中年ぶとりとよく言われますが、わいふの会員もこの例にもれず、

体重の増えた人が25人あるのに対し、やせた人はたったの7人です。

身体的変化なしと答えた24人の人は、

比較的年令の若い方が多く、白髪、しわ、視力減退、体力減退などの老化現象を訴えた人は26人もありました。

## ⑥読書傾向の変化は、さまざまです。

軽いもの、雑誌、実用書など気軽なもののしか読まなくなった人(11人)。これは家庭の平均的主婦像かもしれません。しかし反対に固い本を読むようになった人(3人)。フィクションからノンフィクションへ(5人)。仕事上の専門書や勉強の目的意識を持った読書をするようになった人(8人)。意欲的読書、乱読(15人)など、多種多様です。読書のヒマなし、新聞やつと(2人)という人もあります。

が、しかし、全般的に見て、わいふの会員は読書好きという印象を受けました。⑦12年間で一番印象的な私的・社会的出来事を各、一つずつという設問をしたのですが、たくさん列記してある人が多かったようです。一つに限定してしまえなかったということでしょうか。

まず私的な出来事から。

圧倒的に多かったのは出産・育児の16人です。次に肉親・親友の死が10人。人間の生死の問題はいつの時代になっても人々の一番の関心事であることがよくわかります。その次は土地・家屋の購入4人とぐんと下がります。その他、病気、旅行、失恋、夫の家出、PTAの経験(以下略)……など書きあげていくと29項目にもなってしまうました。

社会的な出来事

ベトナム戦争とその終結 16人

公害・地球の環境汚染 8人

石油ショック・インフレ 7人

ケネディ暗殺 6人

アポロ月到着 4人

浅間山荘事件 4人

その他赤軍派、連続爆破、ハイジャック、三島・川端の自殺、万博、東京オリンピックなど、合計24項目があげられていました。

⑧自分が一番変わったと思われる面と、かわらない面。

とりどりの個性豊かな表現で書きあらわされており、それを簡単に要約してしまふことは、私の能力ではとても不可能です。そこで私の受けた大ざっぱな印象を述べるだけにしたいと思います。

ずぶとくなった、明るくがめつく、生き方の自覚、理想主義から現実主義へ、許容的、妥協的、したたかな女へ、積極的になる、人間の幅広くなる、大人になる、心身共に強くなる――

こういった力強い言葉を吹き出させる土壌は、情熱的ではあるが不安定な青年期を脱し、一家の中心として地に足のついた生活者としての自信ではないでしょうか。親に頼っていた娘時代とちがって、子供達から頼られ、或いは、今度は親からも頼られる存在になったという環境の変化が、人間の意識や生き方を変えていくのでしょうか。

それに対して、変えようとしても、なかなか変わらないのが、性格的なものらしいです。

怠け者、気のきかぬ、中途半端、せわ

# 【表紙絵の言葉】

## 鶏頭花

神戸市 平田恵美子

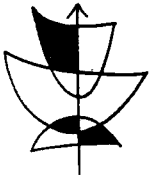
「けいとう」は、夏から秋にかけて長い期間私たちの目を楽しませてくれます。

何気なく通っている道に、コンクリートの破れ目や、石垣の合い間から勢いよく伸びている鮮やかな鶏頭の花を見つけたとき、自然の力強さを感じずにはいられません。

美しい花の色も、だんだん黒ずみばらばらと種がこぼれる頃、葉は赤味を加えます。今を盛りと咲き誇る姿も美しいですが、晩秋から初冬へと霜にうたれて、うなだれる面影もまた感傷的なものです。

この絵の花は、ときかや、玉のような形でなく、針のような無数の花びらが燃えて炎のように立ち上がりやがて色あせ、その元に、黒く光った小さな種を実らせるのです。

写生のおそい私には、今秋の長雨がにくりしいのです。



好き、お人好し、自主性欠ける、ガンコ、やりくり下手、意志薄弱、悲観主義、楽天的、計画性がない——等々です。

⑨一番望んでいたこととその結果、今一番望んでいることとその展望。

まず驚かされた事は、12年前に仕事をしたい、仕事を続けたいと思っていた人が18人もいて、結婚や家庭に夢を描いていた人8人を大きく上まわっていたことです。子供の成長を願う7人を合わせても、仕事組が多いのです。

しかし現実はずいぶん、望みが挫折したと答えたのは仕事組15人で、ほとんど大半です。

現在の望みは、

- 職業をもつて働きたい 15人
- 子供の成長・家族の健康 13人
- 絵や研究など自分の趣味 12人
- 公害のない住みよい世の中 6人
- マイホーム 2人

などとなっています。

⑩わいふ入会のきつかけ

- 朝日新聞による記事から 33人
- わいふ会員を通じて 22人
- 暮しの手帖 7人
- 団地新聞など 3人

このうち朝日新聞による会員は比較的新しい会員です。わいふ200余名の会員中、このアンケートに回答を寄せていただいた65名の半分は新しい会員の方からということがよくわかりました。

⑪「わいふ」に入会して良かった点。

友人を得た、仲間意識がもてた、ふれあいの場、連帯感などをあげている人（約20名）

自分の生活への刺激となる、啓発される、励まされる、清涼剤であるなど（約15人）

多くの主婦のものの見方、本心をさらけ出したナマの声を知り得た、地道に活動している主婦の存在を知るなど（約20人）

が目立ちました。その他、書くようこび、自分の考えをまとめて書く習慣がつく、ボツにならないで書けば載せてもらえる開かれた門戸。毎月きちんととけられる嬉しさなどをあげている人もありました。

わいふ存続が決定した今、質問の⑭⑮は無意味なものになってしまいました。

⑮の回答欄に参加の意志なしを表明された方も、思い直して新生わいふを見守っていたதாக、お願い申し上げます。

さて最後に、これまでのわいふの反省の意味をこめて、⑫番の「わいふに不満足だった点」について皆様のお書きになったものを列記してみたいと思います。

- 反応・議論がなさすぎる。
- タメになっても力にならなかった。
- きれいなことが多い。もつとどろ／＼したものをはき出せたら。
- 会員数のわりに投稿が少なく、読み手会員が多すぎる。

○思いっきの投稿の集まりでなく、一つのテーマを腰をすえて追いかけた方がよい。

○毎号あまりにマンネリ。きびしい前進の姿勢とハグレ良さがほしかった。

○書いて記事になるだけで「終った」こと

とになり、反応のない一方通行の感じ。○もつと違った世代のわいふ達の発想を知りたかった。

○「女」であることに素直すぎるようだ。○会員同志会う機会が少ない。地域別に小さな会をもつてつながりを深めたかった。

○誌上討論がなさすぎた。

○思想性がなかった。

○自分たち仲間の城を築いているように思えた。

○一人一人のつぶやきが点のままで終る。

○投稿しやすい雰囲気を作る努力をしてほしかった。

※ ※ ※

このアンケートを読んでいて、皆さん豊かな内容をもって、書ける方が多いのを再認識させられました。アンケート以外で、こういった方々からの原稿を集められないでマンネリに陥っていた編集部は力不足と、皆さまのこうした色々なわいふへの期待やねがいをくみ取ることで出来なかったことを深くおわび致します。

本当に長い間、関西でのわいふにおつき合い下さいまして、どうもありがとうございます。

会費の加不足の方に、会費納入状況をそれぞれ同封しました。会費未納の方は至急お送り下さいませ。関西でのわいふは50年10月分まで、一ヵ月25円の値段で納めていただくよう計算しています。

2ヵ月に一回の発行になってからのわいふ一冊は250円です。137号までお送りいただいている方は6ヵ月分250円の不足となりますのでよろしく願います。

## 私のこと

板谷美佐子

東大阪市

### 夫とのこと

私が独立してアトリエを持ち、工芸高校夜間の生徒をアシスタントにして仕事もいそがしくなった頃、出入りしていた印刷会社の営業マンとして彼も仕事をもち込むようになった。はじめは少し変わった感じの人だなあーくらいにしか思っていなかったが、口が悪いというか、妙に私を引きつけることを言う。そまつな身なりだが清潔に洗濯されたシャツから出ているたくましい腕は男を感じさせた。会社の工場の二階に一人で寝起きし、洗濯も日曜日にまとめてタライでゴシゴシやっていると。好きなものはお酒つり。

あまりペラペラとはしゃべらないが、しゃべり出すと面白い。

そのうちに私は彼になら抱かれないと思いはじめた。ポパイ程ではないが正に男の腕だと思った。純情な当時の私は彼に抱かれるのには結婚するしかないと思った。

そうです。私が彼と結婚したいと思ったのは彼が知的だったからでもなく、私を幸せにしてくれるといったからでもなく、ハンサムだったからでもなく、私は彼に抱かれたかったのです。

### 結婚

父には「タデ食う虫も好きずき……と言うがよくもあんなヤツと」と言われなが

ら、それでも私一人だけの十日間の家出もあって、しぶしぶ納得してくれた両親の顔を立てて人並みに結婚式をした。私には無意味に思えた結婚式だが、父や母の気持ち思い、彼の「ここまで来たら親にさからわんと式をしたらええやないか」と言うのに従った。

私が彼と結婚すると決って、同じデザイナー仲間がこのことを言って私はこう付け加えた。「私はあの人を不幸にはしない。あの人を幸せにしたい……」と言った。男である友人はその時、「女がそんなこと言う」と男はイヤな気がするもんじゃない」と言う。

どうしてだろう？ 少くとも男が女をくどく時には洋の東西を問わず、「ボクは君を幸せにしてみせる」といったセリフが出てくるのではないか。女がそう思っただうして可愛気がないというのだろうか。私は真剣にそう思い真面目にそういつたのに。

当の彼の方は私にこう言った。

「オレと結婚しても幸せになるとはかぎらん、もしかすると橋の下に住むようなことになってもエエか？」

私はそんな彼の言葉を、「ナルホド、この人は先のまだわからんことを大きく言う人より信頼出来るんやないやろか」

しかし考えてみると、彼が「君には苦勞はさせへん、キット幸せに

してみせる」

といってくれたとしたら、私は「私はなんと幸せな人間だろう」と幸福な気持ちになったにちがいない。結局のそこホレてしまった男の言う言葉はどっちにしても自分のエエ様に解釈してしまう女で私はあったのかも知れない。

### 子供

彼と結婚して五ヶ月目に妊娠に気付いた。バス・コンの失敗が生理のみだれか、三年程は仕事も軌道にのってきいているのを充実させ、展覧会の作品にも力を入れてと思っていた時だけに子供を生むのはまだ早いなあと思ったが、妊娠していると知ったらやはり彼の子はほしい。彼の様に人間としてまったくノーマルな神経を持っている人の子供はどんなにいい子が出来るかかわからない。

彼によく似た息子は今は十六才になっている。

子供はその意志にかわりなくこの世に生み出される、しかし生まれた子供にはその両親をえらぶ自由はまったくない。又、私達もただの人間、考え方がどこでどう変わるかわからない。私が彼を愛していると思っていたところで、お互いの心の中まで踏み込めない。人間は自由に思考し、行動出来るのがやはり本当の生き方ではないかと私は思っていたので、彼との結婚にしても彼が私の元に私の思い通りにしてくれたのでは私はつらいし、そんな生き方はウソだと思っていた。それは私の生き方にもかかわってくる。そうなる子供というものが宙に浮いてくる。生んだからには、子供を不幸にしてはな

らない。この様な言い方は親の思い上がりかも知れないが。私は心ひそかに自分に言いかけた。「彼には彼の自由に生きてもらおう、子供をカスガイにはしたくない、そして私も彼に対する愛が消えた時には私は別の生き方を考える、そして子供への全責任は私が持つ」。彼にしてみれば私がこんな風に考えていたなんて考えもしなかっただろうと思うし、彼に対して彼の気持ちを無視した失敬な考え方だと思いが、これが私のせい一ぱいの彼への愛し方だったと思う。

そんな風に考えていた私は子供は一人だけであとは生む勇気がなかった。

それなのに私は息子を生んで八年目に又娘を生んだ。女はどうしてこう子供をほしくなるのだろうか。やはり生めるものならせめて二人くらいは……の思いに抗し切れなかった。ごめんさい、二人の子供達、自分の都合で生むのどうのと、本当に申し訳ないと思っている。

### 仕事

フリーで仕事を始めたのは二十一才の時、不思議に私の作品は喜ばれた。女のグラフィックデザイナーが少なかつたせいかも知れない。

学生時代極度にお金に不自由な生活を送った私は、フリーで仕事を始めることで完全に親の負担にならずに生活出来ることとがうれしかった。結婚するまでは親元にアトリエを持っていたが、大勢の兄や弟妹達に囲まれていても、私にはこの家はまったく仮の住いとしか思えなかつた。いいえ、親元とは子供にとって仮の住いなのではないのだろうか。

私が仕事をやり続けるということとは自分自身が生きると言うことにつながる。フリーになってから結婚するまでは親には下宿代と世話を払った。結婚の段取りもそれに必要な祝儀のたぐいに至るまで親には負担はかけなかった。自分のことは自分が全責任を負うためにも仕事は必要なことでした。

そして今も、仕事の内容は変わって来ているがグラフィックデザインを仕事としている。若い頃の夢の様に有名なデザイナーにはなれなかったし、サンデツキのあるアトリエも造れなかったが、私が自分が子供の頃から好きだった絵に関連のあるデザインという仕事をみつけることが出来たのが、私がいろいろな不利な条件の中でも仕事を続けられた原因だったろうと思っている。

自分一人だけの仕事だと思い、育児や夫の仕事の不調の中で死闘をして来たと思ったこともあったが、今となって息子や娘が私の仕事をほこりに思ってくれているのがうれしくもあり、恥ずかしい様な気持ちでいる。

#### 例会に出席して

十月五日の例会で不況でパートの人達の首切り等の話を聞く。よくパートの人の首切りは表面に浮いて見えるが、この不況の底で苦しみにあえいでいる零細業者のあることも忘れてはいけないと思う。

近くの小さな町工場の経営者は夫婦でヤクルトを配ったり内職をしている。事情を聞いてみると仕事がパツタリ来なくなり、といって工場を閉めた訳でもないのていつ仕事に来るかも知れない。雇って

いる人も全部やめてしまわれては仕事が出来た時には困るので、仕事がなくても給料を払わないといけないので、とに角その初老の夫婦は言う。

又、夫の仕事もあまりそれと変らない面を持つている。商いの10%くらいがやつと利益になる。得意先が大手とか、とも角つぶれる心配のないところならいいが、集金のはとんどを手形で支払ってくれる得意先が小企業の仲間にも入っていないところがほとんどとなると正に崖っぶちに逆立ちの気分になる。

夫は馬車馬の様に働いている。転動もないが、昇格もなければ、ボーナスもない。何度か手にした不渡り手形のたびに人間不信におちいる。

それでも「今となってはオレにはこれしかない……」と言ってがんばる夫には何も言えない。その夫は九月に胃炎を起し、十月に入ってカゼを引きヒューヒュー言いながら寝ても居られない。息子は「お父さんは働きすぎやで、大丈夫やろか」と心配気に私に言う。

大丈夫なものか、と思う。働き過ぎなのだ、と思うが夫はとめても体が動く間は静養しない人だし、又、そんなことをしたらもう仕事は来なくなる。夫にはそれが生きがいなのかとも知れないと思ってみるが悲しくなる。

夫の保険の話題もあったが、私は夫に保険を掛けない。非現実的だと思うが夫を金に替えたくない。

一日中大阪の街を車で走りまわっているところと危険が待ちうけているかも知れない。

らない。しかし、人間、死ぬ時は死ぬ。夫にしろ子供にしろ自分にしろ。本当に生きることがきびしいことだと思ふ。

息子が小学五年生の時一人で十日間の東京旅行をした。その時、「もし何か事故でもあれば私は親としてせめられるかも知れない、その時はそれを言い訳せずに受けよう」と思って旅行に出した。その息子が中学三年の時には今度は大勢の仲間も居たが外国へ行った。その時もやはり万一の覚悟をした。

愛しい者たちと暮らすと、毎日毎日がなにやら覚悟をして生きている様なものだと思う。

ワイフのアンケートの中の将来への展望を私に聞いて下さったが、私はアイマインに「何もなし」と笑った様に思う。

家に帰ってもう一度考えてみた。やはり別に何がどうとも思われないが夫に悠々自適と言える生活をしてもらうにはどうしたらいいかと思う。五十代になる頃迄にはなんとか見付けなくちゃと思う。



今年の十二月で、私がワイフを新聞で知って九二年になります。こうしてもう今年一ばいワイフが仁川から東京へうつるというのは、入会したばかりと言ってもいい私にとって淋しいことです。投稿は只の一回、例会は先日のとて二回バザー一回、高木さんや編集にあたっての方々には申し訳ない会員でした。私は、年がいもなく妙に人見知りする悪いクセがあり、思っていること、言いたいことの何分の一も表現出来ないところ

ろもあり、例会の時でも何かトンチンカンで我ながらイヤになりました。

このままでは、せつ角皆様との仲間に入りたいと願っているのに、自分からフワーと遠のいてるみたいで不安になり、自分のことを書いてみました。

#### 【お便り】

明石市 川端 泰子

「わいふ」東京の方達が続けて下さるそうでホッとしています。読み手ばかりでしたが、楽しみにしていましたので……

明石に住んでいると自然お魚と接する機会が多く、PCB汚染以来、買物に出てもほんとうに買物に困ります。この辺りで獲れるものに変な魚も多いと聞きます。表向きは言わず大繁昌で売っていますが——娘三人居ますとやはり出産する身と思ひ、食べ物への蓄積が気になります。

六甲勤労センターの安全食品を求める会に入って卵を分けてもらっていますが、この様なやり方はお金とひまのある人しか出来ないもので、考えさせられます。自然食品とレッテルを貼られたものはお高い値段で少し、信じてよいのかもありませんね。

だんだんと住みにくくなり、子供達の為にもなるだけよい世の中を残しておかなくては……と感じて居ります。

## 買物ブギ

池田市 日比野 都



私のこのごろの愉しみのひとつに、閉

店まぎわのダイエーゆきがある。ミンチ肉が半額になったり、もやしや豆腐が馬鹿みたいな値段に下げられて、利巧な買物ができうれしくてたまらないからである。そういうときの私のマナコは、後藤美和子さんにいわせれば、まさに、ランランと光り輝いているそうである。高い化粧品をつけんでも、表情が輝くなんて一石何鳥と申しましようか、健康上からいってもおおいによろしいではありませんか。

さて、九月二十九日の午後六時半頃のことである(閉店、七時)。加工の日付が一日前の二十八日になっている豚の腕肉のうす切り、100g当り125円のが、一パックどれも50円均一なんです。それで、正味242g、302円、同じく214g、267円の二パックで100円なり。九月二十九日が加工日の豚肉ステーキ、100g当り175円、344g入り602円のが300円とあり、ふつうに買えば、合計1171円の筈が、半値以下の400円で買えて、笑いがとまらなかった。

また三十日も偵察に行つてやろ、また

買えばいいやと、親馬鹿は、そっくり近くの団地住まい、安サラーマンの女房で、やりくり三昧、ドケチの娘にプレセント、ええカッコしたつてわけ。

さて、三十日火曜日、再び快感を味わわんものと、勇躍、愛車を駆つて(実は十五年乗っているオンボロ自転車、オホホホ)馳せ参じた。ところが案に相違して、柳の下にドジョウはいなかった。次の日が水曜日で定休日になるというのに肉類一切全然値下げせんではないか。おかしいなあ。だったら、娘に気前よくやるのではなかった、しまったの後悔も後の祭り、では致し方なしとシブシア他を見廻したところ、もやしが一袋5円、豆腐が5円、食パン一斤30円とある。シメシメと、それらを買つて家路へと急いだ。ふとレジを見たら、なんとなんと5円だから、別に要らんのに買った豆腐が50円についているではないか。クヤシッ。しかし、翌日は定休日、その次の日は講演を頼まれている。レジを忘れんようサイフにしかと入れ、帰りにダイエーによつて、45円を取り返さなきゃあ。

さて、当日はあいにくの雨降り、仕事ですんだら「お車が待つております、どうぞ」ときた。私は車には弱いし、なんせ鈍行で、ふらふら行くのが好きな人間である。いらんことをしてくれるなあとガツカリしたが、すでによんでくれて待つているというのに意地を張るのもおとなげないと、仕方なしに乗った。

私「本人の希望もきかんと、お役所つてもったいないことをするわねえ。私、電車の方が好きなのに。あんだこま化し

て乗せてつたことにしてもうけてくれはつたらしいのだけど、あかんの？」

運「いえ、チケットもらつてましてそれちゃんと出さんならんので、乗つてもらわんと困りますわ。市民の税金つこうてどうかとおもいますわ。偉いさん方から、よう遠くのお家までチケットで乗つて帰りはりませ。私らおかげさまで、もうけさせてもらえて助かつてますけどう。ま、持ちつ持たれつの腐れ縁でとこですわ」

「私、閉店ギリギリの時間に、値下げされた品物買うの生甲斐でして、三十日、お豆腐5円だから買いましたのに、調べてくださいいな」ときわめてにこやかに申し入れた。(怒つてはまずい)すぐに分つて「申しわけありませんでした」とこれまたニコニコ。

いろいろ世間話をして、おかげで楽しく、酔わんと池田まで無事到着。

「ダイエーの前でおろしてちようだいな、カクカシカシカのわけで、45円返してもらいによりますよつて」

「そうでつか、面白いお客さんで、私も楽しゅうおましたわ、しっかり取り返してきとくんはなれ」

「勿論です。お互いに元気ががんばりま

しょう。さようなら」  
私のフトコロは痛まぬものの、私鉄で230円ですむところを、タクシード代なんと485円なり、アホらし。

## 告

## 急

この間の天皇の記者会見についての感想——自分の感想、まわりの感想を是非よせて下さい。次号「わいふ」に特集を予定しています。老若男女、様々の年令、様々の階層の人々の感想を集めたいと考えています。(職業・年令は明記、誌上匿名は自由)千二百字以内。一行か二行のはしり書きでも結構。〆切12月20日。尚、これ以外のどんなテーマでも、どんな短いものでもかまいません。ふるつてご投稿下さい。

原稿・誌代の送り先

〒162 東京都新宿区加賀町2の3

田中 喜美子宛

# ドン・ジュアンは恋を知らない

神戸市 能勢はつみ

昨五月、文学座公演「ドン・ジュアン」を上演で見た。

江守徹の、少しお腹を突き出す癖のある独特の歩き方と、他の出演者達殆どにも共通する大変な早口の台詞が少し聞き辛い点を除けば、私には実に楽しい一刻だった。同じ鈴木力衛訳でも、ただ読むと芝居を見るのでは大違いで、特に私の場合、創造・想像、各力の無さが相乗し、戯曲を読んだだけでは到底これ程の喜劇性は捉え得なかった。

けれど、思った。

ドン・ジュアンは恋を知らない、と。

彼自身を支配していた官能の情欲は、相手の人格を認めることにより、相手を愛し、又、それによって自己を啓発し昇華する精神性を、彼の内面には全く存在させ得なかったから……。

彼にとって、多くの女性と肉体的に関りを持つことは可能であったが、それはその行為自体によって起る飢渴の連続に他ならなかった。如何なる種類の女性と、又、如何に多くの女性と関りを持っても、彼の身内より湧き起る焦燥感を消すことはできなかった。つまり、誰よりも深い孤独地獄に間断なく襲われ続けているに等しい状態にあったと想われる。が、こういった深層に介在していたと想像できる心理について、おそらく彼自身は意識

していなかったであろうから、一種強迫神経症の解釈も成り立つように思われる。

本人にとっては暖味さのない、実に単純な行動を重ねているに過ぎないことも、それによって当然生ずる、次から次へと重複変化する状況は、周囲の人間にとつて、(特にモリエールのものに於ける従僕スガナレルにとつては、御主人様の行動を、逐一、否応なく知らねばならない立場に置かれ、それどころか止むなく共犯を強いられましては、彼の内部撞着甚だしく、も早複雑さは混乱となり、)収拾不可能な集積としか言い得ぬ状態に陥らされる。

が然し、D・Jにとつては、それらは既に完結し終えた苦の過去の事象でしかあり得ない。

彼には人を納得させるだけの主義や理論はなく、ただ(御自分のお気に召すまま)(感ずるまま)(意の赴くまま)自己認識の甘さの上に立つて行動しているに過ぎない。

ところが、結果として、全く怪しからぬことに、より劇的に、独創的に、そして象徴的にさえ生きてしまったのである。それは後世の吾々を、他ならぬドン・ジュアンであるが故に魅了している。

気障っぽく言えば、彼自身の「人生」というキヤムバスに、とりどりの女性と

いゝ絵具を使い、極めて荒々しいタッチで思ふさま自己を容認したナルシスト的自画像を描きながら画家とでも言えようか。

彼は或色を筆にとる。キヤムバスに塗る。と次の色を求めて筆先はパレットの上を駆け廻る。が、この画家の特色は殆どの場合二度と同じ色を使おうとはしないことにある。パレットの上に氣に入る色がなければ、手近なチューブから絞り出しさえすればよい。勿論それが他人様のものであれ……。或時は隣り合った色と色とのパレットの上での偶然性から、

予期せず生れる殆ど無限に近い多くの色彩は、彼を奮い起たせる刺激となり、又実際に絵筆を揮わせ楽しませもしたが、彼に言わせればそれらの絵具は、取り上げるのを待っているのみの、バーミリオンであり、ビリジャンであり、かつまた諸々の混色の生み出す、彼の快樂という色調の為の色数にしかすぎぬ。彼がそれらを画面に加えるに当っては、せいぜい絵筆の号数を変えろとか、時たま趣きを変えてペインティング・ナイフやパレットナイフに持ち変えるかの労をとればよいに過ぎない。その時の絵具にティントがついていようといまいと、その瞬間に彼が欲したという事実のみが大切なのであって、その為に用いられるメデュウム、

即ち周囲の事情などは全く意に介さない。ドンヌ・エルヴィールという色彩を背景に、各々の場所へ適宜に(と、D・Jが考えた)用いられた多くの色彩(『女性達』人々々々)は、D・Jという画家「D・J」というモチーフの、華やかな色彩の中

に、光と陰となって、その人生も、そしてまた、その女性達一人々々に関り合う婚約者・恋人・夫・親・兄弟姉妹・その他周囲の悉くの人達をも、その関連度に於て、各々に沈められ、静められてしまっている。

画家としての彼の眼は冷徹で、普通、恋という特殊な心理のプリズムを透した画家であれば、その可視光線は少くとも彼なりの特有な光線となって美しく拡大分離され、実際の色彩以上の効果を揚げて恋する者の心にその映像は結ばれる。

然し、D・Jにはそれが無い。

彼は恋を知らないから。純粹に言えば、芸術家にとって、その作品は彼等の咀嚼を為した一種の廃泄物といえよう。然し作品に対しての愛着・固執は消し難いものと想われる。

が、D・Jに於ては何等愛着の片鱗もない。在るのは新たな目前の女性の存在であり、それによる猪猛な行動を呼び興す義務観念であった。

恋には多少とも伴われる、優越感と劣等感が同時に共存し、二人がお互いにお互の心の支配者となることも、彼の場合にはなかった。恋を覚えた時から、それまでと何の変わりもない周囲の事象が、全く一変するという、視覚的变化も起りはないし、恋する者の分別を失った極限状態に於ける支離滅裂さなど、起したくとも起きはしない。目的に向つての明確なる進路を、さほどの努力もなく至って冷静に開いてゆく行動があるだけだ。

相手に与えた言葉の一つ／＼を反題し、その時その瞬間の自分の心の角度により、

耐え難いまでの羞恥と悔恨に身を貫かれ、自らを残酷な時間の中へ、湧き起る疑惑の塊と共に投入する無駄もない。

自分の吐露した言葉は、も早、採譜の要どころか、思ひ出す要さえない口から出まかせの即興に過ぎぬ。然しかつてそれを唇にのせた時には、相手は勿論、自らをも陶酔せしめた、目的の為の時間の芸術、しかも瞬間々々に完全に消却し得るものでしかない。《恋の悩み》などというものは従つてこの超人には生ずる懸念はなく、彼の行動に関して悩みぬき、良心の呵責に苦しみ、剩さ彼に代つて神に謝罪せずにはいられないのは前述したスガナレルであり、エルウィールであり、父のドン・ルイであるといった次第で、全く生憎なことに御本人はそれらに隔靴の搔痒さを感じはしない。或は悩むなどという繊細な神経は最初から欠落してゐなくては存在し得なかつた人格と言わねばならないものなのかも知れない。また俗っぽく言えば、育ちの割には粗雑で無神経な人間として成長してしまつた人物と言ふべきか。

然しそれが強ちこの人物の構成に役立っていないとは言へぬ。否、故にこそ成立し得ている。彼の口説きに於て全く相手の制約された諸条件を無視しての、一方的な発露である為の素朴さが、逆に遂には洗練と同格となつたり、或は練達の到りであるが為の粗野であるために多くの女性が惹かれたのかも知れないから。彼の厚釜しさは対象となつた女性達からは、しばしば愛情の深さと錯覚され、もの慣れた口説きは情熱の迸り以外の何

ものでもないと曲解されたようだ。

恋する者にとつて相手はエキセントリックなものである。否むしろエキセントリックに感じたからこそ恋を感じ始めると言ふべきであろうが、何はともあれ、こんな感情をいち／＼自己のうちに発見するめんどろな手続きなど一切不要、常に先を急がねばならないD・Jとしては、体験を重ねる毎に自信を深め、己の征服手腕に酔ひはしても、純なる情愛に身を委ねた人間の感動は味わい得なかつた。

人間がお互にお互の抗し難い魅力に惹き込まれ、《愛する》という、心を能動的に用いねばならない心理活動は為し得なかつた人物と言ひ度い。

また、恋にはつきものの感傷性もなく、思いやり、優しさ、はにかみ、と、それらによる不安や慄きや、苦惱、懊惱等という、極く当り前に生ずる感情は皆無に等しい。

その代り、飛びぬけて明朗、快活、派手、率直、言い代えれば、破廉恥で図太い押し強さ、自己主張のみの強引さとそれ等を雄弁に表現する弁舌に加え、恵まれた富裕と地位、その上憎らしいことに抜群の社交術と洗練性、美貌等の資質を併せ持つてゐる。

スペインで、フォークロアとして彼が出生し、MIRACLESとしてなのか、何れにせよ宗教劇として生きた上、イタリヤへ行つて、チコニーニとジリベルトによつて鱈案され(一六五〇〜五二)快楽を愛する情熱漢としての性格が強張されたのは、その国民性によるものであらうか。

次いでフランスへ入り(一六六〇年頃)二、三の劇場で評判を得、そこへ「タルチュフ」上演禁止に困惑していたモリエールが目をつけて筋書をそっくり借り、短期間で書き上げ、自身の劇団の窮地を救ひ得た作品「ドン・ジュアン」となつたが、その中のD・Jは発生来の人物像に加へ一・二幕での漁色家、女つたらしで従僕スガナレルに愚痴られる色事師であるのだが、彼なりの色道哲学めいたものは

「美しい女なら誰だつて、われわれの心を奪う権利があるんだ。自分が最初の女だからつて、ほかの女たちがわれわれに心を寄せるのを、邪魔だてしていいつて法はあるまい。……………」

一人の女に惚れたからつて、なにもほかの女につれなくなしくちやならん義理はなからう。おれの目はすべての女のいいところを見つめるためについているんだ。……………」

……要するに恋心の芽生えはじめには言うに言われぬ魅力があるもので、恋のよろこびとは、すべてそれが移り変つて行くなかにあるのだ。数々のお世辞を並べて、若い女の心をなびかせてゆく、涉りぐあいを確かめる。

か弱い抵抗のことごとくを一步／＼と打ち破る……………目指すところまで女をそつと連れて行く、これにまさるよろこびをほかで味わえると思うかい。しかし一旦手に入れたら最後だ、も早懂れもない。美しい恋の炎は消え失せて、ただうとうとと平穏な愛のなかでまどろむばかりだ。もし誰か新しい女が現われてわれわれの情熱を呼びさまし、征服欲をかき

立てる強い魅力を見せてくれない限りはな。……………」

つまり彼自身はそれを「恋」と表現してはいるものの、事實はスポーツであり単なるゲームでしかない。そのゲームも他の誰が決めたものでも造り出したものでもない、後自身の定めた真に勝手極むるルール即ち、自分の思うままに振舞えばよいという作法に従うまでのものでしかなかった。次いで三幕では当時の医学の非合理性を説き無神論を大胆に語る合理主義者であるし、作中では従僕に語らせている理性万能論者である。四幕では詭弁を弄して借金取りをごまかし、父親に對してはあくことなき不孝ぶりを披露に及ぶ。ついでに偽善者としての良心の無さを披瀝してついに天罰を受けて結末に到るが、そこには作者モリエールが劇団内の主だった女優を、それも亭主持ちを片端から口説いたという事実が投影され、また当時の宗教界の偽信者達、聖職者達(タルチュフ禁止に追い込んだ)を皮肉る反抗精神を盛り込んでゐるといわれている点により、D・Jの人間性を單なる女つたらしではなくしているものの、恋愛をお互の人格を認め合うことにより始まるものとして考える時、彼は明らかに近代の合理性を導ぶ人間として認められ

てはしても、近代の恋愛は知らない男性として考えるより他ない。

しかし、彼が口説きの情熱に身を灼いている時を、仮に本人の言うが儘に、それを恋と表現するならば、その結果としては本来結婚という結末を得なくてはならないことになる筈で、恋愛を恋愛の儘

持続させる為には、彼の相手となつた女性性が永久に彼に足りない必要があり、万一その状態が可能で、彼もそれを追い続けたとしたならば、無類のロマンティストとしてのD・Jが或時点から可能であつたかも知れないと考えられるところに、一つの救済の論理が存在すると見るのは甘過ぎようか。

しかし幸か不幸か、吾々の前に存在するD・Jは多くの文学作品のみならず、音楽に於ても、モーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」を初め、シュトラウスの「ドン・ファン」(一八八七年レーナウの劇詩にもとづいて幻想風に作曲され一八八九年には初演されている)とても、

「主人公ドンファンが、常に新しい女性性を求めて恋の享樂をむさばるプログラムに従つて、基本主題(D・J)がそのさまざまな状態や心情の変化に応じて変奏されてゆきます。ある場合はやさしく、或る場合は強く、或る場合は軽やかに、或る場合は泪つぱく。そのたびに女性的な主題が応答されて出てくることは言うまでもありません。彼が倦厭の念に苦しみなながらも、新たな情欲にかられて歓樂を求め、その当然の報いで自滅に落ち込む様子が、原詩の『薪は燃え果て、炉辺は寒く暗く』を暗示して、今まで鳴り響いていた風のようなテュッティが止んで、突如、大休止があり、あとは静かな管楽器の和音と、疲れ切つたように下降を続けるヴァイオリンのトレモロと無気味なティムパニーの余韻を残してこの曲は終るのです。——芥川也寸志——

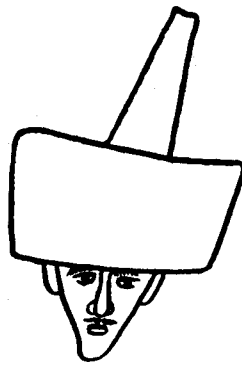
(傍線 能勢) と解かれるように、

「『初めにロゴスありき』によつて導かれると思われるキリスト教に於ける一夫一婦制」——大養道子——にもとづいてのD・Jの発生から来る懼れは、多少とも存在して来た。そして男性であればおそらくは、その女漁りの多さに於て、永遠に憧憬は消えはしないであらう。というよりはその面のみが強調されて生き続けてゆくであらう。

極めて拙くフロイド風に表現するならば、D・Jに於て自己のリビドーの目的を、彼にとつて美しくかつ難攻不落に感じた女性にのみ向けられる、宗教的、倫理的、社会的見地からは不穩当な願望充足は、彼が意識するしないに拘らず、潜在意識的には己の男性度の顯示欲とも考えられるし、一人の女性を征服し了えるという願望充足が、彼の場合は次の女性へと向う誘因となる、運命的に固着を許されないという苦難の人生に耐え忍ぶべく定められた人間であつた。又一面、幼児が次から次へと新しい玩具を手にしたがる未熟度、もしくは未発達な小児性を表しているものなのかも知れない、と女の立場からは言い度くなる。否、言い切れるものなら、単なるモノマニアとでも言い度いのだが、それにしてもD・Jには魅力があり過ぎるし、極めて不本意ながら、正直惹かれることを告白しなくてはならない。

成人として極く一般的な発達を遂げた者なら、穩当でない自己の願望衝動に対しては当然の精神構造として、その内容を否定する何等かの意識が生じ、次いでそれに対しての自己欺瞞が起るべきで

あらうが、そういった一般常識的内部葛藤を、彼D・Jに求めたとして所詮無理、万一それに似たようなものが彼の心の中に萌芽しかけたとて瞬時に枯死させてしまふ超人であるが故に彼の特質が存続し、宗教性は削られようとも、又、幾度び雷鳴を懲罰として受けて死のうとも、常に粧いも新たに時のエビキュレーションとして、颯爽と復活し得る生命力を持つてはあるまいか。



「犯罪を犯しながら幸福になるためには、まさしく良心の呵責を感じないことが必要であらう」——スタンゲール——  
「恋の快楽とは愛することであり、人は相手に感じさせる情熱よりも、自分が感じる情熱によつていっそう幸福になる」——ラ・ロシュフーコー——

結論的に問題を極めて卑近な次元にたぐり寄せて考えてみることにする。

即ち、儒教的精神の残香色濃い明治末年生れの両親によつて、その倫理観の許に育てられた女としては、肉体的官能を追求するD・Jとドンジュアンイズムには全き批判しか覚えない。

然し、日本の近代小説に於ける恋愛の

ように、或はまた作家達(透谷・独歩・藤村等々)のようには言い換えるべきかも知れないが、恋愛をあまりにも理念でのみ捉え過ぎて悲劇もしくは喜劇とさえ言えるまでに現実性を失つてしまふことをよしとはしない。それは理想化され過ぎた恋愛観念を各々が抱き、その中へ現実の女性を当てはめて当然とした、ここでも、根本に於ては女性の本当の人格を認めず己のみを主張したところに、本人達はどうかあれ、一面では滑稽味をさえ生じてしまつたのが事実なのではないだろうか。

「永遠の女性なるもの、率きて我等を行かしむ」——ゲーテ——

「理想の女性、即ち実在の女性を土台として男性がさまざまなイメージを心の中でつけ加え、理想的な姿に作り上げるもの、そして男性の心にそのような作用を起させる原動力を即ち恋と言ふ」

——吉行淳之介——

やはり

ドン・ジュアンは恋を知らない。

舞台のD・Jは今日もまた轟く雷鳴の許、華々しき神箭の受け手として倒れている。







## ある青春 (38)

大阪市 津堂 健治

昭和廿年八月十五日

やっと、まさしくやっと行軍は終わった。而も到着したのは何と「飯野」。結局、元の地に戻ったのだが半数の隊員は消えたまま、彼等は何処へ行つて了つたのだろ。隊長は「行軍は、お前達を充分に鍛えあげた」と、焦点のぼけた訓辞をするが如何にも納得ならぬ。

八月十日

再び兵舎暮しだが、健治は軍医と衛生兵の三人、小さな医務舎におさまつて演習に参加せず、故障者の治療に専念、強行軍後だ、勿論忙しい、頑健だったEまで来たので演習状況を聞くと、中尉の姿がなく「気抜けの風船みたい」と言い、話があると、人気の無い丘に誘う。「何事だ？」と訝れば、ある古兵から聞いた話だがと前置きし、「広島と長崎に新型爆弾が落され、只の一発で街が全滅したらしい」と告げる。「まさか一発の被爆で、そんな事は考えられん。その古兵にからかわれたのだろ」健治は笑うと、Eは真顔で否定する。古兵は外部との連絡係で報道関係とも接触がある由、「それにM中尉が昨夜、軍用オートバイで何処かへ出かけたが、血相を変えていた。又大変な事態が起つたのではないか」Eは行軍の際作つた足のまめを見つめ眉をひそめながら、

「けど、ここだけの話や、絶対内緒だよ」

健治は目で頷いたが不吉なものを感じた。

翌日母からの便りを受取つたが日附は七月中旬、行軍に出た直後だが、勿論検閲済み、軍事郵便とはいへ覗き見された不快を覚える。

「お前様には壮健で軍務に勵まれている由、安心致しました。」先の便り同様くどくどと健康に注意せよとある。が、後の文面は絶えず憂慮し続けた悲しい報らせだった。

「お父さんもお前様が達者なのを喜んで居られたけれど、××日佛様に招かれ逝かれました。数日前には氷砂糖の配給があり、「おいしいなア」と喜ばれました。父さんは安らかに眠られたのですから氣を楽にしておつとめなさい。」

八月廿日

南国の陽ざしは灼けるよう、噂だった広島長崎の惨劇は、はつきり事実と知つたが未だ戦争は継続されていると考えたそれはつい先日、初年兵の一団が廻されて来たからである。

八月廿×日

昨夜は就寝ラッパが丘の各兵舎に鳴り響いても一向閑かにならず、ひそと話しあふ兵士の姿が深夜まで見られた。危惧

したものが厳然たる現実となり朝の点呼に隊長は氣張つた調子で「終戦」を告げる。が大方の者は昨夜に察知していたし、健治達もM中尉から聞かされていて、驚きの反応は薄いが、やはり隊列はざわめいた。すると古兵上りの曹長が真赤になつて怒鳴る。

「静かにしろい、貴様達みたいなグニャグニャした兵隊が居るから日本は敗けたのだ、天皇陛下に濟まないと思はぬのか！」

併し聞いている側は半ば馬耳東風だった。

\* \* \*

終戦と決まつた此の夜は何処からか酒が運ばれ各兵舎は乱痴氣騒ぎで医務室にも清酒が一本届き、軍医は「山中節」をうなっている。健治も酔つた。こんなに呑んだのは始めてだ。

明日はどうなる!! そんな事は知っちゃアいない。M中尉がビールを二本さげ現われたが足許が危い。

「おやじ軍医! 持つて来ましたゾ」とビール瓶をかざす。「何や二本きりか」軍医の声も高い。

「いや、幾らでもある。その衛生兵、俺のとこから四・五本持つてこいや」大声で喚き、衛生兵が去ると残つた健治に目をやる。

「や、津堂兵長かい」と酒臭い息を吐く。「お前は貧乏籤だったナ。獣医候補生のDは四、五日前に大阪へ戻りよつた。我々は次の指令までここに釘止めだ」

「M中尉はこれからどうする」  
ビールを呷つた軍医の声だ。

「どおつておやじさん、こつちは先生達と違ひ職業軍人ですから、こうなつたら国賊扱いされると覚悟をきめますかい、世間の奴等、俺達が戻つたらどんな顔をしますかね、敗残者は辛いよナ、本音を吐けば此の戦争は無謀だった、けど、此の俺達は、国の「守護神」と煽てられ、万才の掛声で送りだされている、全くだい面の皮さ」

「まあ、そう尖りなさんな」  
酔つていても流石に年長者の軍医は中尉を上手に宥めるのだ。

「おやじさん、俺は淋しいぜ」  
「よし判つた、元氣をだして吞もう!」

それから二人は陽気に騒ぎだしたが、健治はそつと抜けだし夜空を仰ぐ。高千穂峰には月がかり、昨夏山佐宅での想い出が甦えつた。

「青馬よ、泣くなよ もう家は近い」

森の中から 灯がみえる

小声で唱うと咽がひきつり、父のやつれた姿が闇に浮かんで消えた。

\* \* \*

健治が復員兵として列車に乗りこめたのは、二百廿日過ぎの台風まがいな砂塵の舞う日だが、M中尉(残務整理で最後まで残らしい)は候補生達に将校用の乗車証を渡してくれる。

「事情にもよるが国鉄全線フリーパスになる。学校へ戻るまで気晴らしの旅でもしろ。もう会えぬだろうが元氣でな」  
彼は駅近くまで見送つてくれたが別れの敬礼をすると、

「階級章は、はずしておくんだナ」と答礼してから背中を向けたが、風に舞う落

葉が將校の肩にかかつて淋しい後姿だった。

復員列車は超満員、人いきれと熱氣、荷物の山で身動きならぬが故郷へ向つていと思えば耐えようもある。が、折角の辛抱も「八代」の手前で立往生、鉄橋が爆破されたのだ。

「情無いな、亦歩くのか」

車外に降り暫らく茫然とした連中もいつとなく重い荷物を担いで歩きだし、傍にEの他顔見知りは無かった。で彼に声をかけると黙って立ち上るが、動作の活発さで学徒兵中抜群だったのが、今は「青菜に塩」二人は爆破された鉄橋を横目に進むが肩の荷がくいこみ行軍途次感じた膝関節の鈍痛がましてくる。喘ぎ乍らかなりの距離を行き、開通した小駅を望めた頃、Eはうずくまって動かない。健治は彼の目をみて驚いた。丸岡のそれとそっくりだ、Eをその場に、附近の農家で「梅干し」と漬物を貰い、五円札を渡すと、

「そんなに戴くのは悪い」と鶏卵を添える。Eは貪るように「梅干し」を口にしてお喜び。給与の缶詰を開け卵をかけ肉片を喰ったが、この豪勢なカロリイ食を口にするのは久しい。一息ついて軍用煙草をふかす。遙かに山波が望めたが、そのずっと先に「飯野」はあるのだらう。

「いろ／＼あったね」と彼を見返す。

「俺達は「若さ」をあの地へ置いてきたのかね」力の弱い声をだしあい、鉄路の枕木から仰いだ空に鋼雲のふわりとしたのが映った。

\* \*

「八代」から「熊本」へ、Eと此処で別れた。彼の遠縁の家があり、暫らく休養してゆくと云う。独りになった健治の旅も辛かった。消耗した体力で何処まで乗っても車内は立錫の余地無い有様、門司で乗換え地下道を通って山陽線のホームへ上るのが大蠅が蠢いて、黒々とし、脱糞が随所に見え異常な臭気だ、更に目ばかりギラつかせる裸足の浮浪者が屯し、はだけた胸からしぼんだ乳首を猿の様な嬰兒におしつける罹災の婦人を見て、祖国の敗戦を確認した。

九月十二日

神戸着午前四時、早朝のふるさととは眠った街だが無惨な変貌に胸が痛む。健治は大荷物と背負い煩を硬く高ぶった歩調だが、敗戦の郷里へ辿る落武者の哀れさ、併し彼の心は躍っていた。懸念した我が家は無事、「俺は生還した」母が真先に起きて呉れよう、弟も姉も、けれど父は、噫父はもうこの世の人ではない。

九月十三日

まる一日泥の様に寝入ったが畳の上のふわとした蒲団の何とソフトな感触だろう。夢は一杯見た様な全然見なかった様な、目が醒めても考える意思はまるでなかった。

「よく眠れたかえ」

母の微笑に深い皺を認め戦中の労苦を察する。

「お前よく戻れたね、本当に帰ってきてくれて嬉しいよ」

「母あさん、これから僕はうんと働くよ」母は無言、大学院進学望みを健治は割切って諦めるつもりだ。

「銭湯へ行つてこようかな」

「御免よ、戻るのが判つたら風呂をたてるのだったけど、随分放つておいて汚なくてね」

母は簞笥からのりのきいた浴衣をだす。一丁程離れた浴場の湯気にむせる、浴客の会話は戦争の惨めな話ばかり耳につき、昨日までの自分の身が嘘の様、家に戻ると着物の前を合せ仏壇の前に坐った。

\* \*

数日静養した後、健治は弟に案内され

「闇市」を歩く。神戸駅から三宮まで被爆で崩れた建物間に波止場が近よつて見えるが、頑丈そうなジープが走り、長身のMPや黒人兵が闊歩する。国鉄ガード下は露店がぎっしりで一杯十円の怪しげなコップ酒から大福餅、食パン、しるこ、塩、砂糖、手巻の粗末な煙草から洋モク、それに米やメリケン粉まで並べられて、戦時中特定の人間だけ入手し得た品が敗戦と一緒に大衆の前に現われた訳だ。食料に限らず靴や衣類、食器、ガラス、セメント、機械工具、医薬品等々、誰も欲望に耐え、重圧と束縛を甘受してきたが、瘦せ渴えた群衆は目を血走らせ物色する、この異様な光景は延々と続き、歩足をゆるめず進むと、時折、膝関節がギクリとなる。

「その兄ちゃん、何かないか、高う買うぜ」

声の主は襦袢姿で背後の柱に「何品によらず高価買入、交換歓迎」とある。「此はどうや」健治はポケットからライターを出したが、行軍の途中拾ったものだ。火付きの良い舶来物だが未練は無い。厭

な「想い出」を早く捨てて了いたい。「良えもんや、ロンソンやろ、けどここにキズがある。惜しいな」

拾う折軍靴で踏みつけたキズだろう。

「金で渡そうか」「いや、メリケン粉と替えて呉れ」男は紙袋に粉をいれる時「出血大サーピスするで」と、ずっしり重いのを渡した。給与の砂糖とゆで小豆の缶詰でいろ／＼出来そうだが、露店はガード下を延々と続き元町あたりで一際ダミ声で客寄せする軍帽が居る。

「巻ずしはどうや、うまいぜ、一本廿円」

「群衆の手が何本ものび札をわし掴みすると赤っぱいのを渡していたが顔に見覚えがある。同じ兵舎の補充兵で学徒兵より数日前帰還した男だった。

家に戻ってみると手紙が届いていたが帰郷通知の返事、

逸川政男の「便り」

生きて帰れたとは目出度い。小生は八月十六日入隊予定だったので宮門はくぐらず「廻れ右」してきた。尤も久しぶりに郷土を眺めた。卒業式は廿五日、現在授業はあるやなしやだからゆつくり静養して上京しろ、復員組も僅かだが顔をみせている。菅瀬菊江も疎開先から戻ってきた。上京したら先ず小生宅へ来てくれ。

学校の紋切型の通知、卒業式日時と追記として「進学希望の有資格者は至急学生課へ照合されたい」とある。未練がないと言えは嘘になる。が現在の家庭事情では無縁の文面だ。

次の日は能登の山中家、差出名は山中乙吉。彼も無事生還したらしく、「子供達が大変世話になった、保養を兼ね遊びに来てくれ」との文面、山中さちと酒巻修吉の面が浮かぶ。

丸岡家からは、昌作の母の筆蹟、「八月十五日、鹿児島県K病院で死去致しました」の一行が胸をうつ。明石市にある彼のを訪れるのは気の重い事だった。

数日おいて江口太郎から連絡あり、山佐大作は未帰還、上京の途次軽井沢に寄れ、松山とに連絡し二人で待つとある。健治は早速到着日時を返事を出した。

廿一日夕刻、健治は一装の夏衣（学生服は疎開荷物にまぎれ、止むを得ずそれを着る）で混雑の大阪駅に立つ。待合室は浮浪者に占有され、罹災者、復員軍人、買出客が焼くすれた構内を往き交うが、みすばらしい柱の向うに白ペンキでR T Oの文字がみえ、そこだけ小さくつばりする。

「一寸、お尋ねしますがの……」

部屋に出入りするG・Iの颯爽とした動きを眺めていた折、気弱そうな声があった。よれた背広、弛んだネクタイの老人が息子らしい国民服の盲人を伴っている。

「わしら、石川県の方へ行きますが何処から乗ったらいのしょう」

「北陸線ですね、ずっと先の八番線です。それ、人が並んでるでしょ」

その一団は、ゆっくり進んでいて改札が始まる。

「早く行きなさい。乗り遅れますよ」

健治は隣の中央線改札口に向うつもりで彼等と一緒に歩いた。

「有難うございます。和倉へはあそこから乗るんですね？」

「和倉!? 能登の和倉ですか」

老人は「さいです」と唱うように答え、不思議な旅情が健治を誘う。老人——輪島の牧蔵さん、盲人——鍼灸師——酒巻修吉、此の連想は過ぎさった休暇の旅を甦らせ、突然彼等に告げて盲人の腕を抱えた。

「急ぎましょう、僕も能登へ行くのです。彼等と共に金沢行に乘れたのは、将校用乗車証のお蔭で、減り去った軍隊の恩恵が、ここでは未だ残っていた。」

金沢から列車を乗り継ぎ和倉で老人達は降りたが、ホームで手を振る。その折健治は気づいたが、若者の着衣に傷夷軍人の徽章があった。

\* \* \*

能登の輪島は変わっていない。変わったのは健治の軍衣姿と酒巻修吉の居ない事だ。それにしても出発の際、及びもしない輪島の地に降り立ったのはどういう積りだろう。目にみえぬ酒巻の幻影が健治の心を揺すったとしかいえない。

郵便局で軽井沢へ日時の変更を打電、海沿いに懐かしい漁村を歩いて石垣と木羽茸屋根の山中家の前に立った。

思いがけず訪れた健治に山中家の人々は驚いたが喜びも一しおだ、夕刻子供達と海に出る。「兄ちゃんはお瘦せたのね」と和子。「兵隊さんは疲れがひどいのさ、うちの父ちゃんだって瘦せたろう」と兄の良吉はしたり顔。「もう一人の兄ちゃんは戦死したんだってネ」と末娘の光子。

健治は訝かって「誰から聞いたの」と問えば「母あちゃんが言ってたよ」と愛らしい顔をみせる。

陽光が真赤に、浜風がきつくなる頃、姉妹は食事仕度の手伝いをするに先に帰り、良吉と二人砂浜に寝ころぶ。

「先刻みっちゃんと言った事やけど」

健治は真意が判らない、で、良吉に確かめると、

「ああ母あさんが言ったのさ、それに修吉兄さんは身体が弱かったのやネ、一昨年の夏兄さん達二人で来たろう、あの秋修吉兄さん独りで来たけど僕に言ったよ、兄さんはもうすぐ死ぬんだって、僕は厭だ」と泣いたけど仕様がないうの、そして遺品に良いもの送るからって別れたの……」

神妙な口調の良吉に再度質する。

「修吉兄さんが来たの何日か覚えてるかい」

二年前の出来事だし、少年は当時小学生、無理な質問と思ったのに、きっぱり告げるのだ。

「九月十二日だよ、その日に来て、次の晩帰ったんだ、だってあの日は僕の誕生日なんだもの」

「良吉君、間違いないね」健治が溜息をつく、

「本当や、嘘やない」と口を尖らせる。「御免、疑った訳やないさ、実は僕も九月十二日生れなんだ」

少年と健治の誕生日が一致するのも何かの因縁だが、予備学生の浅田茂が告げた修吉失踪の時も明らかになった。良吉は遺品に酒巻が愛読した「次郎物語」の全

巻を送って貰っている。

「とても長いお話だから、未だ読みきれない」

「そう、良い本だからゆっくり読むんだネ」

「うん、あ、そうそう本の終りの所に修吉兄さん、ペン書きしてくれたけど横文字で判らない」

「フランス語なら駄目だけど英語なら判るだろ、後で見せてくれなにか……」

水平線上の雲に夕陽が射て白浪が高く紅の海に接近するのをみつめる。

「こんな所でしたの」

山中さちが夕餉の準備が出来たと告げて近づくと少年は裸足になって駆け出す。健治はさちと並んでゆっくり彼の後を追う。

「良吉君、すっかり大きくなりましたネ」

「春から中学一年生ですもの」

それに応えず夕映の彼女を見る。

「酒巻が戦死したと言ったそうすネ」さちは無言になり、暫くして立ちどまった。

「酒巻はあの秋こちらへ来たのですか」

浜はかげりをおび、海風がさちのおくれ毛を揺すっている。彼女の低い声がした。

「津堂さん、私がいけなかったのです。淋しかったのです。突然夫が征き、修吉さんまで征ってしまうのが……あの方は、もうすぐ征くのだと言いました。私はどうかしてたのです。征っては駄目と口走りました」

健吉はさちを責めるつもりは無い。もしそうなら修吉を侮辱する事になろう。「奥さんは思い違ひしてますよ。彼は事故死でした。此は事実です。奥さんがど

えこむ必要はない苦です、でないと天上の酒巻修吉を残念がらせるだけです。貴女には御主人も還つて来られた、戦争は終わったのですもの、今までの苦しみは忘れねば、そうやないですか」

俯したままだったのがやがて顔が微かな淡い口もとが能登の夜に美しかった。

× × × × ×

翌朝山中家を辞した健治は駅に戻る道から外れて風に逆らい海辺に向うと暑さは感じられず雨雲がのぞいて能登の外浦は憂愁を湛えている。重い灰色の空と海が静かに冬の季節の到来を恐れるふうであり湿った浜辺の先に老婆が独り流木を拾っていたが、黙々と作業を続け健治を一顧だにせぬ。永遠に課せられたいとなみともみえる影、能登の風土は老婆に何を語りかけているのか、彼女の背負った風雪の生涯が「人生」を象徴する様に思えたものだ。

輪島から七尾、羽咋、高田、油の様に静かな能登の海は、そこまでで列車は北陸路直江津からは信越本線だが、目を閉じると海女の山中さちを想う。酒巻修吉が「征くと言ったのは正しく、逝く」だったのだ、それは良吉に贈った「次郎物語」の終りに記された英文の記述で明瞭である。

私の悲願は文学による平和の美の追求だ、生を享けて二十年、目標はかたきも忘れていない。だが実際にはすべてが戦争の醜い期間だった、今やレジスタンスも終ろうとしている。私は宣言する、平

和の為に身を捧げると。私は、未だ若い、「自由」の抱負は数限りあるが贅沢は言うまい、私は「美の陶醉」の歓びを知ったのであるから。

昭和十八年九月廿日 S・S

S・Sは勿論彼の頭文字だし九月廿日の日附は疑う余地のない死への突入だ。が何故に良吉少年に贈った書物に此の文章を記したのか健治の能登行を指示したのではないか、大阪駅で行先を尋ねた老人と盲人は修吉の化身だったかも知れぬ。彼の輪稿は九月廿二日、そして健治が気まぐれに山中家を訪れたのが、正確に二年後の同じ日だ。奇妙な一致、健治の背筋を冷たいものがはしる。酒巻修吉は今でさえ健治の心を支えているのか、もしかしたら九州の苛酷な軍隊生活を耐えさせたのも彼の加護の故かも知れない。

列車の「小諸」を過ぎ「軽井沢」に近づくとつれ健治は必死に頭の中を整理しようとする。入隊の折彼のノートを焼却したが、彼の「死」を語る充分なものがあった、輪稿の結果は重症だが即死でなく病院で数日の生命を保っている。

私の希み、只一つだけ与えるといわれれば、いつくしみの顔が微笑にて私を見つめてくれること。Forever, forever,

この箇所は誦じていて脳裡からはなれない。そして記述の前後数頁が空白だったのと思う。

新たな推測は列車内で（能登と軽井沢の二点を結ぶ）一気に結論を導きだした。

不思議なまでに坦々と而も言い知れぬ悲哀を抱いて——能登行の甘美な想い出を（Forever, forever）として彼は動員に殉ずる決意をしたのだが九月廿二日にアクションがおこった。重症には違いないがもし彼に洋々とした自由の未来が待ち受けているとしたら、彼は、それこそ徹底して生きる努力をした筈だ。けれど現実には暗く冷酷で重圧だけが前途にある、もはや、能登の女性の「想い出」だけがすべてだ。彼はその女性の名を呼ぶ毎に生への意欲を消したのである。つまり彼の「死」には、やはり山中さちが絡んでいたのだ。

此の判断の哀しさを、健治は自分の身に置き替え怖れを感じた。愛情が如何に純なものであろうと相手に同伴者がある以上、所詮は否んだ終局の響きがある。

能登と軽井沢、酒巻修吉と自分、山中さちと松山とし……

軽井沢駅に数分の時がきた、健治が駅を降りたつと江口太郎が手をあげ、長身の彼の背後で紫衣の女性が微笑するだろう。その瞬間を健治は山の兵舎でも豪雨の中の強行軍でも幾度思いめぐらしたかが今は松山としの女性が山中さちのそれに重なってゆく、彼女と高峯高原の白い療養所が一つの強い絆で結ばれているのを健治は、はつきり悟った。

「軽井沢」駅手の声は不自然な程のんびり耳に流れて列車は停止する。車窓からホームの外のカラ松林が見え小雨が降っていたが、あの林の小径ではもうほそ葉の涙が溜って赤くなる頃だ、その涙は屹度やわらかいだろう。

汽車は動きだした、永い待望の時が一

分間の停車で終るのだ。碓氷峠のトンネルをくぐり、高崎から上野に着くのは日没の頃になる筈、軽井沢駅で待つ江口は電報を握りつぶし「津堂の奴亦すつぽかしたナ」と愚痴り、傍で松山としが首をかしげているかも知れぬ。紫衣に映えた雨傘をさし乍ら……

いずれにしても明後日は学校、ドオムの校舎を学生として最後にみる卒業式の日だ。

健治のまわりで世の中は激しく動いてゆく。車窓の風は、秋を知らせて夏軍衣が少し寒い。

昭和廿年九月廿三日 信越線の車内。

(丁)



## 例会のお知らせ

11月23日（日）午後一時より、高木宅で行います。東京から事務引きつぎに来られる照井さんをお迎えして色々話し合いたいと思います。皆様のお越しをお待ちしています。

